



明治文化の基礎

文學博士 三宅 雪嶺

歐洲にては東洋を概括し、專制政治で守舊保守とするが、同じ東洋でも近東と遠東とに別けたりし、支那と日本とを一緒に取扱ふの傾向があつた。

日本でも支那と近く、夙くから交通し、文物藝藝を採用し、文化に於て實を同じくするが如く考へた所がある。同種同文と云ふのもこれを意味する。或は日本の文明が悉く大陸より來り、特別に日本の文化と稱すべきものがないと云ふに及ぶ。併し、密接の交通があつたにせよ、殆んど全く歴史の系統を異にし、それだけ文化を異にすべく、その結果の顯はれた所、現

に見るが如くである。歐洲で、東洋を守舊保守とするのは、形の上で顯はれてゐるやうであつて、條件付に解せねばならぬ所がある。

支那は守舊の標本の如く見られるが、近年の状態はどうであるか。帝制を廢し、共和としてより、傳統的の事一切を捨てやうとし、反孔子熱が頗る昂つてゐる。日本で、孔子を尊敬するなど話にならぬ、それで親善が出来るものか、と稱する。儒教でも、文學でも、破壊し去るの勢ひであり、守舊どころか、過激的急進の勢ひがある。

併し、それでどこ迄續くか。破壊して如何に建設するか、疑問に屬する。舊文明を失ひ、新文明なきに終るのでないかと疑はれる。昔から、この例がないでなく、子孫帝王萬世の業と稱した秦も、陳勝吳廣が起つて、瞬く間に破滅して了つた。破壊すること頗る早く、只漸くして秩序が成立てば、その儘久しく續き、特別に進歩を見ぬ。創業と守成とを分つのもそれからであらう。創業にのみ銳意進捗し、次いで守舊に移り、幾代も同一状態を續けることになる。俗に所謂急だら／＼であり、大體に於て、進歩を見るに難い。

創業の勢ひを以て進めば、どこ迄進歩するか計り難く、只永續させず、守舊の實を示すに至る。一時急進し、次いで困難の儘にするのは東洋に珍らしくない。阿弗利加の黒人は狂するが如く浮立つかと思れば、少時にしてもとの儘になつてしまふ。

東洋の急進はこれより永續するけれど、進歩發達を續けることが出来ぬ。歐洲とても程度の違ひに過ぎぬが、比較的進歩發達を繼續する所がある。日本も、歴史上進歩の速度が早かつたとは云へぬが、幾百年かづゝに區別して見れば、後は後程幾らか進歩するの明白なるものがある。他の諸國は後よりも前が進んでをり、日本は前よりも後が進んでゐる。種々の事情あつてのことでも、兎に角その事實を認める。

その文化に於て、大陸と何の違ひがあるかと云ふに、一層精確を重んずると云ふを擧げねばならぬ。大陸で茫漠なる状態にて、曲りなりにして置く所を、日本ではそれで氣が済まず、何とか明晰にしようと思掛ける。刀劍にしても、形が似てゐて、日本の方が切れ味が好い。切らないでもたゞけばよいと云ふものゝ、日本の刀は割合に日本が勝り、延いて科學的にも勝る。兵を大陸に擧びながら、實に於て、これに勝るに至つた。數學的のことは割合に日本が勝り、延いて科學的にも勝る。

日本で、測量術を如何にして得たにせよ、百年前に全國の測量を終り、歐米と交通する時、歐米で新に測量するの必要がなかつた。政府で少しも獎勵せず、有志家が長崎に赴き、醫學及理化學を學ぶに励め、人體を解剖したりした。歐米と接觸すると共に、一般に興味を以て學ぼうとしたのは、醫學に關聯して理化學である。

舊幕の末、理化學關係の冊子が続りに出で、人が好んでこれを讀んだ。漢文のをその儘讀むか、又はこれを和譯する。洋學が盛んになつたのは、理化學に對する興味に負ふところが多い、兵制でも何でも、歐米に行ふところが、筋道の明らかになるを覺え、これを學ぼうとするやうになる。早く云へば、科學的趣味が多いと云つて宜い。

支那では、日本よりも早く歐洲の星學數學を採用したが、外國人に委ね、國人自ら學ぼうとするのが甚だ少ない。天文臺が日本より整つてをりながら、その知識は進まなんだ。

明治維新以降、さまざまのことがあるけれど、科學應用を念とし、これで歐米に劣るまいとしたことは、半世紀間の進歩發達に與つてゐる。尙ほ歐米に及ばぬ所があるが、進歩が明白であつて、同等になるべき確信がある。何でも科學の力に依らねばならぬと云ふのが主になり、その爲に思想問題をなほざりにした嫌ひがある。

舊幕の末から、歐米に渡つたものは、いろ／＼あるけれど、主として着眼するのは、科學關係のことで、思想問題は不興

識な程注意を拂はなんだ。種本は云ふに及はず、藤澤さへさうであり、中村（教字）が西國立志篇を刊行したのが、僅に專想方面の注意を促したところがある。

支那が外國と交通したのは日本に先んじてゐるながら、自ら好んで科學を修めるやうなのは稀で、それで、日本と戦つて、舊來の習慣に安んずべからざるを知ると共に、多くの留學生が外に出でたが、軍事か法制經濟かを修め、近來、世界の新思想を吸収するに急である。露國の思想に共鳴する所もある。マルクスを何程研究するか、今日迄のところ、思想でも、科學關係のものでも、最も痛快で早わかりするのに向はうとする。研究するよりも記憶し、判斷するよりも感興に走る。精確に調査しやうとする念が乏しいやうである。

今後如何に變ずるかわからぬが、科學に興味を覺ゆることは少なさうである。

三

日本がどれ程科學的に進み得るか、解らぬけれど、大陸に比べて、科學的に傾くところが多い。精確でなければ満足出来ぬ所がある。東洋に在つて、世界の文化に貢獻し得るの希望があるのもこれに依る。

支那の急進は眞に誤まれりとするよりも、何か目先の變つたものを覺めやうとするらしい。日本でもさう云ふことがあるにせよ、努力して精確を期しやうとする所が割合に多い。併し、日本の現状でさへ、尙ほ科學を學んじ、科學の弊を嘲笑つたりするのは、矢張東洋に國を建てるものと見られるでなからうか。今の科學の状態で安んずるなど、心細い次第である。何の事でも科學的にするのは面倒であつて、骨が折れる。寺で禪問答をするが如き、骨が折れると云つて、遊戯的分子が加つてゐる。早く宗教的に信仰を得やうとする勢ひが相應に盛んであり、これも宜い事であり、心の向く儘に信仰すべきであるが、それで科學的研究の氣勢を挫くやうなことがあつてはならぬ。

日本の科學狀態では、科學の弊を謂つてゐるころでない。更に進んだ後にして差支へない。思想問題にしても、骨を惜しまず、根柢から作りあける心得がなくてはならぬ。マルクスの力あるのも、面白半分に見像したのと違ひ、久しい間題勉して、調査した所にある。若し日本で思想の末のみに馳せ、今の支那と變りなければ、東洋全體が歐米に劣ることとなる。

日本が多少亞細亞大陸と違ふのは、地形が斯く茫漠ならず、歐洲の國柄に似てゐるにも依らう。茫漠にして置けず、精確に考へやうとする所がある。

一長一短で、精確を欲する所にこせついで面白味が少ない所がある。或はこれを島國根性と非難したりする。併し、日本が歐米と對抗して世界の文化に貢獻し得るの可能性は、遊戲的に思想を取扱つて安んぜず、努力して精確を期するにあるではないか。今一層科學の研究に力めたならば、彼と同等以上のことを望むことが出来る。佛敎でも、儒敎でも、日本に可也熟してをり、印度支那に優るとも劣るまい。これにも力を須ゆべきところあれど、科學の研究に於て、歐米と同等以上を期するのが何よりである。

藝術にしても、歐米の本場は科學に根ざしてゐるところが多い。數百年前にミケランゼロが描いたり、彫刻したりしたところ、如何に科學的主旨に協つてゐるか。科學より出て、簡單に還り、グロテスクになるのに妙味があるが、科學を通らずに、直に簡單にし、グロテスクにするのは、一時人の興味を惹いても永續させぬ。東洋にはどこか歐米と變つた所があり、これを無くしやうとしても得られず、これを發達して世界に貢獻し得るが、折角科學的知識の進み、科學的研究の盛んにならうとする日本に於て、その氣勢を挫くやうなことはあつてはならぬ。

科學を輕んずるは歐米にもあれど、日本でこれを同様に輕んじては、矢張普通の東洋國であることを證明することになる。これ迄は東洋にあつて、普通に東洋とする所と違つてゐるので知られてゐる。

支那や印度は舊文明を失ひ、新文明を作るところがない。今後新に得るとしても、今日迄特に云ふべき所がない。日本でこゝ一つ辛抱して勉勵すれば、羣に東洋十億の民の爲めに氣を吐くのみでなく、世界の文化を補ふに足る。少しくその邊の消息に注意すれば、さうせずに居られなくならう。一時面白くして安んずるのは歐米でも東洋の通弊とする所である。